存在しない「領土問題」から考える

石塚　秀雄

存在しないとされる問題や語られない問題にこそ、真に論争的な問題が潜んでいるのではないか。事柄については近頃では「南京事件」、従軍慰安婦問題、君が代斉唱強制問題などが思い浮かぶし、かつては非正規労働は労働組合では語られなかったテーマである。アメリカ黒人作家ラルフ・エリソンの小説『インビジブル・マン』は、アメリカ黒人少年物語であったが、アメリカ社会において、黒人は見えない存在であるということがテーマであった。語られないということは、語り切れないということでもあり、小田和正の歌にあるように『言葉にできない』感情や情緒の領域というものも存在している。さらには問題が「正しく」提起されていないとか、あるいはゆがんだ形で捉えられているということもある。こうした事柄は人々の思考の中でどのように取り扱われているのであろうか。フーテンの寅さんのセリフではないが「それを言っちゃおしまいよ」という世間の知恵というものとしてあるのであろうか。それは現状維持のために良好な相互関係を崩さず、事を深刻化しないすなわち矛盾対立点を、部分的に極大化しないという当面の対処方法であろう。しかし、言っちゃって、より高次の関係性に止揚できるならば、言うことも積極的なことではあるが、自己チュウの心持ちであるならば、相互関係性は破壊されて、やはり「それを言っちゃお終い」になることになる。

たとえば、「領土問題は存在しない」と尖閣諸島問題で日本政府は言明する。中国・台湾に門前払いを食わせんがためである。一方、ロシア政府だって「北方領土問題」は存在しないと言っている。日本を門前払いせんがためである。竹島問題でも同断。しかしわれわれにとって問題は政府の公式見解をあげつらうことよりも、このアポリアを国民あるいは人

民の立場として主体的にどのように捉えるのかということのほうである。政府の言説については、そもそもアポリアと見なすこと自体が、意味のないことだとも言える。国際ゲームは真偽を論理的に証明することではなく、言葉はゲームでの道具のほんの一部にしかすぎない。こうした言説が必要なのは、どちらかといえば自国民向けのメッセージとしてである。それはナショナリズムすなわち一国国家主義である。しかもこの日本イデオロギーは右派左派共有のものである。

国家は国民の代表だという仮説的前提があり、また国家間条約や協定などが、政府や政体が変わっても継承性があると見なされている。たとえば、ソビエトとロシアは同一のものであるのか。清王朝と人民中国、明治政府と現行日本国は同一のものであるのか。法解釈などの常識を持って継承性を是認するのであろうが、それはあくまでも、普通の国家論であろう。

さて私は「領土問題」では「我が国固有の領土だ」という発想には同調しないので、別の解決策を夢想している。すなわち、当面において、グレーゾーンの国家間共有化である。

考えてみれば、日本国内にだって治外法権の場所がある。米軍基地である。沖縄のみならず、東京にも青森にも神奈川にも、いろいろなところに散在する。北端や南端の島々だけではない。愛国心があるなら、それら全部に対して「失地回復」運動をしなければ、ご都合主義もよいところではないか。貸与などと言い訳してはいけない。

グローバル化の時代、一国主義の意義は徐々に薄れつつある。経済は相互に依存しあっているし、先進国間での戦争はほぼなくなりつつある。EU、EFTA、ASEAN、WTO、FTA、さらに関税ゼロ化をめざすTPPなど経済協定、経済共同体や地域連合はヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカ、そしてアフリカなどにも広がりつつある。国際問題は、普通には国家同士がそれらの当事者となると見なされている。国家は近代的な産物である。現在国家は世界に二〇〇ヵ国くらいあり、その規模は一万人から一五億人と様々であり、その形態も様々である。経済のグローバル化は国家の自律性あるいは国家のカバーする領域を狭めつつある。いまや国家の権限を越えて、TPPに見られるように企業の他国への経済参入の権利が、国家よりも優先して認められる状況にある。関税のない国家とはなにか。

社会的システムの議論の最先端は、グローバル化あるいは超国境化という要素を重視しているのであって、一国主義的立場を陳腐化させつつある。しかし、依然として一国主義もそれなりの影響力を持っていることはたしかである。おそらく日本においても。一国主義は一八世紀近代以降に登場した国家主義あるいは民族主義に端を発し、民族主義、帝国主義、反植民地主義、一国社会主義、一国福祉国家などが登場してきた。

国家は領土を持ち、いまや世界にテーラ・インコグニータ（terra incognita）はすでに存在しない。

ところで日本の国内でも外国人あるいは外国資本が土地や不動産をたくさん購入しているという。北海道や本州の水資源地である山林の一部が外国人の所有になっていて、問題視され始めている。さらに一部の地方自治体の水管理などに外国企業が参入している。さらに一方で、東京都は一千億円もの事業に投資して、外国国家の水資源ビジネスに参入している。日本の富の少なからぬ数十兆円という金額が外国勢力の手に渡っているとの統計もある。また海外に流出する企業も大小あわせて多くある。

それやこれやがあるのだから、「我が国固有の領土」などという物言いは、ちぐはぐきわまりない状況になっている。いわゆる北方領土については、これもまた形式的には多くの個人が地主として存在している。もし、返還されれば、地主の土地取引を巡って不動産会社が活躍するであろう。たとえば北方領土問題は、リージョナルな地域発展の場として考えるのが良い。現に住んでいるロシアの人々、旧島民とその子孫たちの利益がそれぞれに満たされるような解決方法として、ロシアと日本の共同管理地域にしたらよい。しかし、その実現はむずかしい。民族排外的国家主義的傾向が根強いからである。仮に北方四島が全部日本のものになって、現ロシア島民を追い出すことになれば、それは不幸なことであり、また日本人旧島民たちが改めて北方四島に「戻る」というのもほとんどないであろうし、結局単なる経済的な利権の売買の場になるであろう。

領土問題と資源問題を結びつけて考える節もあるが、これは地球規模に拡大して考えれば、それほどのメリットがあるわけではない。資源独占をしても商品化や貿易をしなければそれは富として実現しないわけであるが、貿易で一方的独占的な利益を得るということはあまりない。相互利益ということを考えなければ、長期的には破綻するからであり、古典的な暴力による収奪経済は、一時的にあり得ても、時代遅れであり反動的であるからである。

そうであるならば、「我が国固有の領土」にして資源独占しても、総体的にあまりメリットはない。リージョナルな友好的経済関係を結び共同利用することのほうが、自国民にとっても利益がある。

「領土問題」とはロジックで解決できる問題ではなくパワーの問題であるならば、そうした場合、ロジックは単なる口実あるいはマヌーバー、あるいはイデオロギーにすぎない。国際問題は当事者として国際的なプレイヤーが複数存在する。同様に、国内問題も当事者が複数存在するはずである。

しかし政治的言説は、ゲームの一環であるから、ウソもま

た「正しい」言説である。一国内にのみ通用する論理的整合性はあくまでも国内の自国民むけの言説にしかすぎない。自国民がその定義を真と見なすことによって、別の当事者である外国政府への政治的駆け引きの武器として使えることになる。

これではいわゆる水掛け論ということになるが、外交とは商取引の値引き交渉と同じように、結局は妥協あるいは相互承認による条件取引という結論にむけて、続けられるものなのであろう。ゼロサムゲームであるならば、最悪の場合武力衝突にいたるのであろう。

そうであるならば、「我が国の領土」というのは前提条件となる仮説にしかすぎないのであって、それの真偽は本質的に重要ではない。自分だけの論理の範囲で外交政治的ゲームが行われるわけはないので、複数の当事者あるいはプレイヤーをそもそも前提しているのであるから、その戦術の選択肢の組み合わせは、国内向けだけの単純さを当然維持することはできないのである。国内議論は自国民を操作するものでしかなく、外交交渉は全く別の論理で国民に隠して行われることになる。古くは沖縄密約問題であり、新しきはＴＰＰ秘密交渉問題である。

しかるに自国中心的な発想をとるいわゆる一国主義者はその名のとおり一刻者なので、狭隘な自国民にしか通用しない論理を組み立てて、問題が解決できると見せかけ、自国民はそれを錯覚して是認することになる。それはなぜであるのか。排他的な自国政府への支持を獲得するためであるが、それを国益と呼ぶのは、そうしたほうが時の政府の政策にとって都合がよいからである。その時々の政府の利益が、必ずしも自国民の利益と合致するかどうかは、歴史や同時代史を見ても、はなはだ少ないことである。政府は国民の支持を得なければならない、という政治メカニズムにおける仮説的「国民主権」というねじれが、そうした必要性をもたらすのである。だから国民主権は、たえず詭弁により無力化にさらされるのである。国民主権は人民主権に転換する必要がある。

現在の日本において、存在しない問題、あるいは語られない問題は、他にもたとえば、韓国との従軍慰安婦問題、天皇制と共和制の可能性の問題、福島原発と自治体消失問題、差別問題など、程度の差はあるが、これまでにもこれからも多く存在するであろう。これらはいずれも形式論で肩すかしを食ったり、無視されたりしてきたのである。しかし、それらに目をつぶることは、国民精神を徐々に浸食していき、その劣化をもたらし、人民主権や人権の発揮を阻害するのである。現在の日本にその兆候は顕在化している。日本社会はどのように転化していくのか。われわれはどのような社会をもたらそうとしているのか。問題提起力の中に解答が内包されているとはマルクスの言葉であったろうか。